

業績説明書（荻原祐二 東京理科大学）**主要業績 1（論文 2）**

Ogihara, Y., & Uchida, Y. (2014). Does individualism bring happiness? Negative effects of individualism on interpersonal relationships and happiness. *Frontiers in Psychology*, 5, 135. <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2014.00135>

歴史的に個人主義的な文化ではない日本における個人主義化が、親しい対人関係を希薄化させ幸福感を低下させる可能性について検討した。個人主義制度は競争を通じて対人関係を悪化させるが、欧米では対人関係を積極的に構築することで、この負の影響を克服している。一方、東アジアではこの負の影響を克服する戦略を備えておらず幸福感が低下している可能性がある。そこで、日本とアメリカで、個人主義傾向と親しい友人の数、幸福感の関連を検討した。2つの研究で一貫して、日本では個人主義傾向は親しい友人の数、幸福感と負の関連にあったが、アメリカでは負の関連は見られなかった。これまで個別に進められてきた文化適合（cultural match）研究と文化変容（cultural change）研究を融合し、双方に新たな貢献をもたらした。（328 字）

主要業績 2（論文 4）

Ogihara, Y., Fujita, H., Tominaga, H., Ishigaki, S., Kashimoto, T., Takahashi, A., Toyohara, K., & Uchida, Y. (2015). Are common names becoming less common? The rise in uniqueness and individualism in Japan. *Frontiers in Psychology*, 6, 1490. <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2015.01490>

欧米文化の個人主義化が示されてきたが、歴史的背景の異なる東アジアにおいて同様の文化変容が見られるかは明らかでなかった。そこで、個人主義指標としての妥当性が確認されている新生児の名前を用いて、日本文化の個人主義化について検討した。2004年から2013年までの二つの独立したデータを分析した結果、人気のある漢字の割合は増加していたが、人気のある読みの割合は低下していた。また、人気のある読みの書き方は減少していたが、人気のある漢字の読み方は増加していた。よって、人気のある漢字に対して一般的でない読み方をすることで個性的な名前が与えられており、日本文化の個人主義化が示された。欧米とは歴史的背景が異なる東アジアにおいても同様の文化変容が見られることを示した点で意義がある。（329 字）

主要業績 3（論文 6）

Ogihara, Y. (2017). Temporal changes in individualism and their ramification in Japan: Rising individualism and conflicts with persisting collectivism. *Frontiers in Psychology*, 8, 695. <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2017.00695>

これまで文化心理学は、様々な心理・行動傾向の文化差を示し人間理解に貢献してきたが、一時点における複数の文化の比較を行うことが多く、文化がどのように変容しているかという動的な側面については十分に検討してこなかった。しかし、本来文化は動的なものであり、変容し得る。

そこで本論文では、文化の個人主義化に焦点を当て、いかに文化が変容しているか、そしてその変容が人々の心理や行動にどのような影響を与えているかについて概観した。日本文化は多くの側面で個人主義化していたが、同時に集団主義的な側面も維持されていた。その結果、様々なレベルで葛藤や乖離が生じ、自尊心や幸福感が低下している可能性がある。アメリカや中国等の文化の変容と比較しながら、日本文化の変容について議論した。(330 字)

主要業績 4 (論文 9)

Ogihara, Y. (2018). The rise in individualism in Japan: Temporal changes in family structure, 1947-2015. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 49, 1219-1226. <https://doi.org/10.1177/0022022118781504>

家族構造の経時的な変化を分析することによって、日本文化が 1947 年から 2015 年の間に個人主義化したかどうか検証した。先行研究は、日本文化が個人主義化してきたことを示してきたが、その研究数は少なかった。よって、先行研究では用いられていない指標を検討することで、日本文化が個人主義化しているかどうか検証することが必要である。そこで、個人主義傾向を示す妥当な指標であることが確認されている家族構造指標を用いて、人々が家族集団から独立して生活するようになっているかどうかを検討した。その結果、単独世帯・核家族世帯の割合と離婚率は増加し、三世同居世帯の割合と家族サイズは減少していた。家族構造が個人を基礎としたものに変化しており、日本文化の個人主義化が明らかとなった。(325 字)

主要業績 5 (論文 18)

Ogihara, Y. (2021). Direct evidence of the increase in unique names in Japan: The rise of individualism. *Current Research in Behavioral Sciences*, 2, 100056. <https://doi.org/10.1016/j.crbeha.2021.100056>

先行研究は、人気のある名前ランキングを分析することで、日本において一般的な名前の割合が減少し、個人主義傾向のひとつである個性追求傾向が増加していることを示した。しかし、文化変容のプロセスを明らかにするには、個性的な名前が増加しているかを直接検討する必要があった。そこで、新生児の名前のローデータを分析し、2004 年から 2018 年における個性的な名前の割合の経時的変化を直接検討した。その結果、男女を問わず個性的な名前は増加しており、個性追求傾向の増加が示された。さらに、女兒において個性的な名前の増加が顕著であり、親は女兒に対して個性をより強く願うようになっていた。本研究は、性別が文化変容の調整要因であることを示し、文化変容のプロセスを解明することに貢献している。(327 字)